



ウルフヘッド / *Wolf-head* (1978) / チャールス・L・ハーネス (秦新二訳) / サンリオ (文庫・6/25刊・¥420)

核戦争を暗示する、大荒廃の時代が終わり、三千年の歳月が流れ過ぎた。放射能も消え、文明はようやく甦りつつある。だが、その陰で、過去の亡霊たちもまた、密かに生き続けていた。主人公ウルフヘッドは、最愛の妻ベアトラを、そんな亡霊——地下都市に住む、地底人たちの一行に拐われたのだ……。

誘拐された妻を追う主人公と狼——まるで西村寿行だ。ダンテの『神曲』を下敷きにした軽快な冒険小説といえ、その面白さも予想できるだろう。三十年間のキャリアがありながら、わずかに長編四冊——(超)寡作な著者ハーネスの、本編は最新作である。一作ごとに作風が異なるとはいえ、(これだけ間が開けば、当然とも思えるが)本来ならば、先の三長編から紹介されるべき作家だった。もっとも、こんなことを今さら言い出しても、仕方あるまい。

翻訳は読み易い。ただ、間違いが少々目立つのはどうだろう。例えば、エピソードの重要な文章で *gentle mound of earth* を「ゆるやかな土手」などと訳しては、作者の文学的婉曲が台無しだ。これは、明らかに「墓」を意味する表現なのだから。(俊)